

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 25 年 7 月 10 日

申請者 大中真
論文題目 マーティン・ワイトの国際理論—英国学派における国際法史の伝統—
審査員 山内進、川崎恭治、屋敷二郎

1 学位申請論文が対象とするマーティン・ワイトの国際理論は、副題にある国際政治学における英国学派の代表的理論として近年、注目されている。本論文の目的は、ワイトの国際理論を中心に、この英国学派における「国際法史の伝統」を探ることにある。申請者がそのような課題を設定したのは、「国際関係論と国際法の再邂逅、もしくは両者の絆の復権」を目指すためである。主権国家相互のパワーポリティクスだけでなく、国家間の協調を目指す国際法が国際政治で大きな役割を果たしている、との考え方は、たしかに英国学派の大きな特徴である。申請者がそこに着目したのは適切である。

2 本論文の構成は以下のとおりである。「はじめに」、第一部「英国学派の成立過程」第1章「英国学派の定義と源流」、第2章「チャールズ・マンシングによる国際関係論の成立」、第2部「マーティン・ワイトの思想と国際理論」第1章「英国学派の確立者としてのワイト」、第2章「ワイトによる合理主義の国際法学者」、第3章「ワイトによる革命主義の国際法学者」、第4章「ワイトによる現実主義の国際法学者」、「おわりに」

3 本論文は、以下の点において評価される。

第一に、国際政治学における英国学派を「国際法史」の観点から研究対象としたことである。英国学派の研究は日本では皆無に近いが、海外でもこの観点からの研究はない。また、この視点は、歴史と思想を重視する英国学派の解明に資するもので、始まりつつある国際秩序の大きな変化を広い視野から多面的に考えるうえで非常に有益である。また、その基礎作業として英国学派の誕生期に光を当てたことも研究の副産物として評価できるであろう。英国学派の誕生は、英国における国際関係論の成立期と重なっており、本論文は英国学派だけでなく、国際関係論成立の解明にも貢献している。

第二に、この作業を学派の確立者であるワイトの理論を中心に行っていることである。ワイトは、国際理論の理念型を合理主義、革命主義、現実主義の3類型に分けるが、それぞれグロティウス、カント・ビトリア、ホッブズ・プーフェンドルフなどを代表的思想として配置し、これを課題別に縦横に、半ば芸術的に論じ、全体として鮮やかなアンサンブルを構築する。その思想的、歴史的香気がワイトの魅力であるが、逆にそれゆえに分析が難しい。しかし、申請者は、冷静かつ学問的にワイトの3類型を国際法史の視点から分析している。その意味で、本論文は、ワイトに関する独自の本格的な研究として評価される。

第三に、国際法史は、法制史の一分野として研究が進みつつあり、ヨーロッパでは法制史学者による国際法史の記述が増加している。本申請論文は、国際政治学における国際法史の意味という観点からの研究を行っており、その点で学際的な国際法史研究に貢献したものと評価される。

4 とはいえ、英国学派における国際法の重視やグロティウスの評価、研究はワイトではなく、その後継者であるヘッドリー・ブルによって決定的に深められたし、ブルの死後はベネディクト・キングズベリーによって国際法史全般にわたって活発に研究が進められている。今後は、英国学派における「国際法史の伝統」を現在にいたるまで追跡し、そのうえで改めて総合的な研究に高めることが望まれる。むろん、これはあくまでも今後の研究に対する要望であり、本論文の評価を下げるものではない。

5 以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者大中真氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。

